

初期イエーナ時代におけるヘーゲルに関する一考察

——論理学と形而上学をめぐって——

船 盛 茂

序

最近の H. Kimmerle などによるヘーゲル全集出版と関連しての、

イエーナ時代におけるヘーゲルの講義や論文出版の予告、更には幾多の草案についての厳密にして詳細な文献学的研究^{註1}は、これまでの十分な資料に基づいたイエーナ時代におけるヘーゲルの研究を訂正し、彼の体系への錯綜した道程、体系計画などの研究活動理解のため、極めて重要な意義を有するものである。それを踏まえてのイエーナ時代におけるヘーゲルの研究が、今や重要な課題であるといえよう。

我々はこの小論において、初期イエーナ時代におけるヘーゲルの哲学を、この時期特に彼の関心の中心を占めていた論理学と形而上学について検討することにしたい。

講義の予告

一八〇一／二年冬学期 ○「論理学および形而上学」、*「哲学入門」*（シ
ェリングとの共同による）

一八〇二年夏学期 「論理学および形而上学」、*「自然法」*（*Natur*

und Völker-recht）

一八〇二／三年冬学期 「論理学および形而上学」、*「自然法」*

一八〇三年夏学期 「哲学全般」（*Enzyklopädie der Philosophie*）、

「自然法」

一八〇三／四年冬学期 ○「思弁哲学の体系」（*das System der*

spekulativen Philosophie）*「自然法」*

一八〇四年夏学期 「一般哲学体系」（*Ein allgemeines System*

der Philosophie）

一八〇四／五年冬学期 ○「哲学の全学すなわち思弁哲学」（論理学およ

び形而上学）*「自然哲学と精神哲学」*（*Die ganze Wissen-*

schaft der Philosophie）*「論理学および形而上学」*

一八〇五年夏学期 ○「哲学の全学」、*「自然法」*

〔1〕

H. Kimmerle などの研究に基づいたイエーナ時代のヘーゲルの講義や論文出版予告などの大略は次のようになる。

一八〇五／六年冬学期〇「哲学史」〇「純粹数学」〇「实在哲学すなわち自然哲学および精神哲学」(Realphilosophie)

一八〇六年夏学期「純粹数学」〇「自然哲学と精神哲学」〇「思弁哲学すなわち論理学」(Spekulative Philosophie oder Logik)

一八〇六／七年冬学期「純粹数学」〇「自然哲学と精神哲学」〇「精神現象学を先行せしめた思弁哲学すなわち論理学と形而上学」
(Spekulative Philosophie oder Logik und Metaphysik mit vorangehender Phänomenologie des Geistes)

一八〇七年夏学期「純粹数学」〇「自然哲学と精神哲学」〇「精神現象学を先行せしめた論理学と形而上学」

論文・草案関係(周知のものは省略)

一八〇二年「論理学および形而上学」の講義予告に関連し、著書出版の予告

「ドイツ憲法論」清書断片、「人倫の体系」が翌年の春にかけて。

一八〇三年「哲学全般」がコッタ書店より出版の予定。尚この年の講義予告の「哲学全般」はこの本の概要の予定であった。

一八〇四年 Rosenkranz 伝える「神的三角形について」(Von göttlichen Dreieck)の断片

一八〇五年 バンベルクの書店ゲープハルトと「学の体系」の出版契約。これと関連するものとして、一八〇五年五月頃の「学の体系、一部・意識の経験の学」の企画断片。更に一

八〇五年五月〜一八〇七年一月の「学の体系、一部・精神の現象学」がある。

この他に H. Kimmeler は多くの草案をその研究時期の順に挙げて^{註2}いる。これらはその大部分が、彼の講義計画や論文出版計画と関連するものであり、その意味では彼の研究の歩みを知る上で重要なものであるが、あまりに多数であるのでここでは割愛したい。^{註3}

以上挙げてきたものから判断するとき、イエーナ時代におけるヘーゲルの活動は概観して次のようになる。

① 論理学および形而上学、あるいは思弁哲学

② 自然哲学(純粹数学なども含む)

③ 精神哲学(ドイツ憲法論、人倫の体系、更には自然法など)

そしてイエーナ時代後半には以上のものに加えて

④ 哲学史、それとの関連で精神現象学

と極めて広範多岐に、換言すれば体系の構築へと向けられているといえよう。

ところで体系の生成に際し、直接体系の構造・細部へと着手することはできない。イエーナ時代初期のヘーゲルの置かれていた思想状況というものを考慮するとき、よりそうである。Rasson は『イエーナ論理学・形而上学そして自然哲学』の序文において、青年時代のヘーゲルの発展段階を、まず最初にフランクフルト時代にはその方法を、次いで初期イエーナ時代にはその体系を、そして最後に『精神現象学』を立案する時には、その用語を見出したと位置づけている。^{註4}しかし

そのうちの第二段階に限っていうならば、Rasson は前述のヘーゲルの論文の執筆時期を一八〇一―一八〇二年と判断した結果、そのような解釈をしたわけであるが、しかし最近の研究の結果、それが一八〇四―一八〇五年にかけてのものであることが明らかとなり、これによりイエーナ時代初期に限るならば、Rasson の解釈の再検討を迫られることになった。フランクフルト時代のヘーゲルは専ら宗教の研究に向かい、宗教のうちに最高の理想を求めており、それに対し哲学は悟性の立場に立つにすぎなかった。そのヘーゲルが『キリスト教の実定性』の序論改稿において、「有限なもの無限なものへの関係の形而上学的考察」^{註5}、すなわち宗教から哲学へ向かうことを、イエーナへと移る直前に表明していることから考えるとき、初期のイエーナ時代のヘーゲルがまずなさねばならなかったことが、体系への入門・基礎づけの努力でなければならなかったことは明らかである。

確かにこのような点での論究は、既にフランクフルト時代末のイエースの宗教研究を通じて獲得された生・愛の概念のうちにもある意味では確認できるし、またイエーナへ移ってすぐの『フィヒテ哲学とシェリング哲学の体系の差異』や、『信と知』にて表明された哲学の課題・哲学的認識のうちにもある程度みることができるとは思われる。しかしそこでの論究は、それらの論文の性格もあって、いまだ断片的・間接的にとどまった。この点でイエーナ時代におけるヘーゲルの体系形成において重要な意義を有するのが、論理学と形而上学であろう。

中埜氏はこのことに着目し、論理学と形而上学がイエーナ時代の思

索の中心的位置を占めていることを指摘されているが^{註6}、けだしの確な把握であろう。それは論理学と形而上学の講義予告が上の一覧表から明らかのように、一八〇一年冬学期イエーナ大学での教授活動開始以来、天体一貫して予告されている^{註7}といった外面的根拠によるのみでなく、むしろその内容、更にはヘーゲルがそれに課した課題の点でよりそのことがいえよう。勿論論理学と形而上学がイエーナ時代の体系構想において重要な位置と意味を有するといっても、必ずしもそれはイエーナ時代を通じて一貫しているわけではなく、除々に変化している。そしてその変化は体系の構想の変化に対応している^{註8}。ところで後年のヘーゲルの体系において論理学は「思惟の諸規定をそれ自体において考察」するものであり、その「思惟の諸規定はかくて具体的な純粹諸思想、すなわち万物のそれ自体において存在する根拠という価値および意味をもっている諸概念である。それ故に論理学は本質的に思弁哲学である」^{註9}といい、論理学が同時に形而上学であること、とりわけそのすぐれた意味において学 (Wissenschaft) そのものであることを強調している。しかしイエーナ時代特にその初期においては、少なくとも我々が上の講義予告などからみる限り、両者は一応別々のものとして考えられている。それではイエーナ時代初期において、論理学と形而上学の各々は如何なるものとして考えられ、どのような関係において捉えられているのであろうか。

(二)

イエーナ時代初期における論理学と形而上学を論じる場合、我々はそれを一方ではフランクフルト時代末の論文や、イエーナへ移ってすぐの『差異』や『信と知』などとの関連で扱う必要がある。一八〇〇年十一月のシェリングへの手紙^{註10}で、これから後「学」へと向かうこと、これまで青年時代を通じ理想としてきたものが、反省形態・体系へと転化せざるをえないことについて表明したヘーゲルは、イエーナへ移ってカントやフィヒテそしてヤコービなどの哲学の批判を通じ、自らの哲学的立場の確立に専心する。

青年時代のイエスの教えの研究を通じて獲得される愛は、単なる抽象的統一でなく、適対するものうちに自らを見い出す生ける統一（lebendige Einheit）^{註11}であり、宗教こそはその充実（*zihyoak*）^{註12}であった。反省作用を媒介してのそのような理想の学的認識への体系化こそが、イエーナへ赴くに際してのヘーゲルの新たな課題であった。そのような当時のヘーゲルの解決を迫られていた問題を、我々はすでに「反省的悟性概念の客体性を越えた生ける統一に、反省の媒介がいかにして可能か」という命題の内に定式化した。^{註13}すなわち全一なる生の生ける統一と分裂・対立そして有限性の関係こそが、ヘーゲルにとり緊急を要する問題であった。それをヘーゲルは『差異』において理性・反省そして悟性の関係として論じる。すなわち絶対者・無限性の能力としての理性と、有限性の能力としての悟性の関係の再考がなされねばならなかった。

いうまでもなく悟性は存在者を休らったもの、固定したものの、制限された個別的なものとしてのみうけとり、これらの存在者間の関係を固定してたて、諸制限を完全にすることににより、分裂・対立に固執する立場である。しかし分裂・対立は哲学において単に否定されるべきでない。それというのも「分裂こそが哲学の必要の源泉」^{註14}であり、「分裂を絶対者に——絶対者の現象（*Erscheinung*）として、有限者を無限者に生として定立する」^{註15}ことこそが、哲学の課題であるからである。すなわち分裂・対立しかも固定した対立を、絶対者あるいは絶対的理性の生成・現象とみなす立場に立っている。

理性は生産と産出作用の無限な働きであるが、そこから生成し産出された所産を理性から分離せしめ、対置させ、また相互に独立に作用させ合うことにより、理性から分離せしめるのが悟性である。従って理性による悟性・悟性により措定されたものの否定は単なる否定ではなく、「悟性による分裂の絶対的固定（*das absolute fixieren der Entzweiung*）」^{註16}の否定であり、それにより有限な個別的なものは、絶対的なものと関係づけられ、絶対者の内容とされる。してみれば理性と悟性の関係は、理性は悟性による両断、両断による絶対的な固定化を成り立たせ、それに即して自らを定立するということになる。^{註17}そのような意味において、悟性による分裂・その固定化は、それ自身理性が自らの絶対性を再興させ、自己を再産出するための不可欠の契機であることになる。してみればイエーナ時代初期いまだシェリング的立場に立つとされてきたヘーゲルは、実質的には既に絶対的理性を無

差別としての絶対的同一性とみなすシェリングの立場を越え出ているといえよう。その自己の立場をいまだシェリングの用語を使ってではあるが、フィヒテの自我でもなければシェリングの自然でもない真なる無差別点 (der wahre Indifferenzpunkt) ^{註16} と呼んでいる。展開そのものについてはいまだ不明確であるが、ヘーゲルは哲学がその内に理論的部分と実践的部分を含み、その各々が更にその内に理論的部分と実践的部分の双方を含み、それぞれが絶対者の自己構成としての無差別点へと向かうものとして捉えている。^{註19} その契機としては芸術・宗教そして思弁が考えられている。「無差別」(Indifferenz) というシェリング的言葉を使用しているにもかかわらず、直観による直接的なものではなく、悟性の反省的作用を媒介してのものである。我々はこの分裂を媒介しての絶対者の自己認識の内に、イエーナ時代におけるヘーゲルの体系への基本的姿勢を認めることができる。そこで悟性は理性の絶対性に対立し、それをさまたげるのではなく、むしろその再興のための基礎的役割を果すものとして、積極的に考えられている。

(三)

ところで『差異』における悟性と理性的思惟をめぐっての以上の把握は、ヘーゲルの体系構想において以後当然その基礎とされるべきものである。そして少なくともイエーナの中ばぐらいまでは、講義予告などからも推察される如く、それは論理学と形而上学においてより具体的に体系との関連で論じられることになる。さて論理学と形而上学

に関しては、イエーナへ着いて当初より講義予告がなされ、また事実講義が実施されたと考えられる。^{註20} しかしこの時の講義草案などについては必ずしも明らかでない。我々が現在論理学と形而上学の草案として、しかも比較的初期のものとして確認できるものは、Rosenkranz ^{註21} の報告によるある年の冬学期の論理学と形而上学の講義の序である。この講義の序において述べられている論理学と形而上学、そのうちでも特に前者に関してのその内容及び本来の哲学との関係の内に、上述の『差異』の内容の展開を確認できると共に、初期イエーナ時代におけるヘーゲルの体系の構想の輪郭をある程度捉えることができる。

それによるとヘーゲルはこの中でまず、「私はこの冬諸君に講義する論理学と形而上学の中で、……有限者から始めて、そしてそれがあらかじめ廃棄される限りにおいて、無限者へと行くであろう。」と、哲学が有限者そのものを対象とするのではなく、その止揚を通じての「無限者の認識」であるべきことを指摘している。この点で『差異』におけるヘーゲルの哲学の要求、および課題が、基本的には継承されているといえよう。そのような彼の求める学的認識における論理学の位置と内容に関し、若干長くなるがヘーゲルの言葉を引用してみよう。「すなわち哲学は真理の学として、無限なる認識あるいは絶対者の認識を対象とする。この認識すなわち思弁には、しかし有限なる認識あるいは反省が対立する。といっても両者が絶対的に対立するわけではない。……理性的認識あるいは哲学の中には、おそらく有限なる認識の形式もまた措定されるが、同時にその有限性は、お互いに

関係させられることにより廃棄される。真の論理学の対象はそれ故有限性の諸形式の提出、しかも経験的に集められたものではなく、理性から出現する通りの、しかし悟性のために理性から奪われて、ただその有限性において現われる通りの諸形式を提出することである。——次にいかに悟性が理性を同一性の産出の点で模倣する (nachahmen) か、しかしいかに形式的な同一性を産出しうるだけかという、悟性の努力が叙述されなければならない。けれども悟性を模倣的なものとして認識するためには、我々は同時に悟性が模写する (kopieren) ところの原像 (Urbild)、理性の表現そのものをいつも目の前におかねばならない。——最後に我々は悟性的形式そのものを理性によって止揚し、認識のこれらの有限な形式が、理性に対して如何なる意味と内容をもつかを示さねばならない、——理性の認識は、それが論理学に属する限り、理性の消極的認識 (negatives Erkennen der Vernunft) となるであろう。^{註22}」

以上のヘーゲルの論述を考察するとき、理性に基づく認識すなわち思弁が、無限者の認識として本来の哲学であるのに対し、論理学は、「有限性の形式の提出」に係わるものである。してみればこの時期論理学がヘーゲルにとっては、一方では以然として伝統的な悟性による形式論理学として捉えられていることは明らかである。しかしそれは論理学は悟性の立場に立つものとして、有限性にのみ係わり、それにより絶対者の認識を疎外するものにすぎないのであろうか。

すでに述べた如く『差異』や『信と知』において、悟性の学的認識

への意義が積極的に評価されたが、それと同じくこの講義の序においても、同一性の産出という点で悟性が理性の模倣であるとして、悟性は理性との関連で捉えられている。論理学は単に悟性的反省の提出する有限な諸形式として、絶対者に無縁のものではない。というのも絶対者は単に自己の安定性に安らっているものではなく、「必然的な分裂が生の一要因であって、生は永遠に対立的に自己を形成するものであり、総体性は最高の段階において、最高の分裂からの再建によってのみ可能」であるからして、分裂を媒介しての自己同一的な運動において存するのであり、理性こそは「分裂を生成および産出過程である無限的活動の中に合一し」^{註23}、根源的同一性を再興するものである。

そして悟性はその分裂項の絶対者との関係を捨象し、そこに形式的な統一を産出する。してみれば論理学において論じられる有限な諸形式は「悟性が模写する原像」すなわち理性の反照 (Widerschein) なのである。それ故論理学における有限なるものは、単なる有限なるものでなく、絶対的なるものから見られた限りでの有限なるものであり、悟性の働きが理性の側から見られているのである。悟性の有限性の認識は、理性により有限性の無限性への関係が示されることにより、有限性の形式そのものが廃棄され、理性の無限的認識へと導かれることになる。それ故論理学は有限性の形式へ関与しても、それにより何ら絶対者の認識に対し妨げとなるのでなく、「絶対者の像をいわば反照の形で前に持ち、それになじませる (vertraut machen)」^{註24}のである。

論理学の以上のような把握に対応し、論理学の展開は

①有限性の普遍的諸形式ないし諸法則あるいは諸カテゴリーを、それらの有限性に従って絶対者の反省（Reflex des Absoluten）として叙述する第一部

②有限性の主観的諸形式すなわち有限な思考、悟性を、同様にかもその進行段階において概念、判断、推論により観察する第二部

③悟性の有限な認識の理性による止揚、この段階は推論の思弁の意味、一般に学的認識の基礎を示す。

以上の三部からなっている。^{註25}論理学のこの最後の段階こそは、『差異』における理性の絶対的否定活動（absolutes Negieren）^{註26}に相当し、理性による悟性の諸形式の止揚として、「本来の哲学、形而上学への移行」^{註27}である。我々は論理学についてのヘーゲルのこのような見解を、ある程度体系全体の構造が明らかとなった一八〇四／五年の『イェーナ論理学・形而上学および自然哲学』の展開にも看取できる。^{註28}してみればイェーナ時代初期において論理学は単なる悟性論理学にとどまるものではなく、理性自身の原像の模写であり、それにより悟性の有限性の形式の止揚という思弁の意味を有することにより、本来の哲学への入門・基礎としての役割を負っていることになる。

〔四〕

ところで論理学の第三段階は、理性による悟性の有限的認識の止揚であり、その限りにおいて理性の消極的認識と呼ばれたわけであるが、これに対し理性の積極的面こそは、その本質をなすものであり、それ

が論じられるのが本来の哲学としての形而上学である。ここに示される論理学と形而上学の関係こそは、一八〇〇年十一月のシェリングへの手紙を考慮に入れるとき、『一八〇〇年体系断片』にて論じられた、有限な生から無限な生への高まり、すなわち「哲学は宗教が現われれば手をひかねばならない」^{註29}という言葉に端的に示される哲学と宗教の関係の、哲学的思惟による一応の克服であるといえよう。

しかし我々は Rosenkranz 伝えるところのこの講義の序において、以上見てきた如く論理学に関しては、その内容更には哲学的思惟におけるその位置などの叙述を認めることができるが、形而上学に関しては、それが本来の哲学であること、それ故「学」の基礎・入門をなす論理学がそれへと移行せざるをえないことの叙述はあっても、その具体的な内容という点になると、少なくとも Rosenkranz の報告に依拠する限り、「何よりもそれがあらゆる哲学の原理の完全な構成をなすべきもの」^{註30}ということ以上のもを認めることはできない。ヘーゲルが『差異』において哲学が理論的部分と実践的部分より構成されるべきものと述べていることについては上で指摘したが、それでは本来の哲学である形而上学とそれら二つの部分すなわち實在哲学（Real-philosophie）とは如何なる関係になるのか。形而上学に属するのか。それとも形而上学から独立するのか。独立するとすれば、形而上学と實在哲学の関係・展開はどのようになり、更には本来の哲学たる形而上学と實在哲学とを結合した総合的な哲学との関係は如何になるのか。これらの問へのヘーゲルの答を少なくともこの序文に求めることはで

きない。その理由がはたしてイエーナの初期にあっては、いまだヘーゲルの関心が専ら哲学の基礎的部分としての論理学と形而上学、その内でもとりわけ前者に集中して、哲学の全体へと向けられていなかったためなのか、それともすでにそれなりの解決は試みていたが、それが単に我々に伝えられていないためなのかは、今のところどちらともいい難い。しかし少なくとも今列挙した形而上学と实在哲学の関係をめぐっての諸問題こそは、イエーナ時代における体系の構想に際し、決して避けて通ることのできない根本的な問題である。また恐らくはイエーナ時代の後半になって論理学がそれまでの入門・基礎としての役割よりも、思弁的な学として体系そのものを構成するものへととなり、それに伴ない学への入門の問題が新たにヘーゲルの意識に登ってくるわけであるが、この問題とも当然からんでくると思われる。しかしこの問題と、その解決の詳細については、この小論での我々の意図を越えるところもあるので、今後の課題とすることにして、ここではイエーナ初期の論理学と形而上学に関連のある限りで、以上の問題を主として講義の予告や、草案などをもとにして概略論じるとどめたい。

『差異』におけるヘーゲルの指摘から明らかのように、これまで述べてきた論理学と形而上学と共に、理論哲学と実践哲学から成る实在哲学もが、当初より彼の大きな関心事であったことは明らかである。確かに実践的な諸問題に関しては、すでにベルン、フランクフルト時代から一貫して研究を行ってきた。しかしそれは勿論いまだ学的体系といった観点からではなく、彼自身の実存から発したものの、彼の言葉

を使えば「人間のより下位の諸必要」(untergeordnetere Bedürfnisse)^{註31}に発したものであった。また他方哲学の理論的領域に関しては、イエーナへ移ってからのシェリングとの共同により彼の重要なテーマとなっている。さて講義予告からわかるように、一八〇三年夏学期になって始めて、それまでの論理学と形而上学にかわり「哲学全般」(Enzyklopädie der Philosophie)が予告される。このことはヘーゲルがこれまでの体系の基礎的部分としての論理学と形而上学と並行して、今やこれまで個々に論じていた理論哲学と実践哲学を体系的構想の内に位置づけ、全体の有機的組織としての絶対者の哲学に着手したことを示している。これ以後一八〇五年夏学期まではほとんど連続して、哲学体系に関する講義の予告がなされ、しかもそこで論理学と形而上学、自然哲学そして精神哲学が体系の構成部門として位置づけられることになる。

しかし論理学と形而上学がこのようにヘーゲルの体系構想の中で明確に位置づけて考えられるに伴い、それまでの両者の関係の把握に変化が生じざるをえない。すなわちそれまで論理学と形而上学は、前者が入門・基礎づけであるのに対し、後者は本来の学として異なるものとみなされていたが、一八〇三／四年冬学期には両者を一括して「先験的観念論」(Idealismus transcendentalen)、一八〇四／五年冬学期には「思弁哲学」(Philosophiam speculativam)更に一八〇六年夏学期には「思弁哲学すなわち論理学」とされ、両者が結合される。というより論理学が形而上学的に構想されることにより、論理学へと

形而上学が吸収され、前者がそのみで本来の哲学としての性格をもつことになり、^{註32}自然哲学、精神哲学と共に体系の構成部門とみなされるようになる。H. Kimmerle は一八〇三／四年冬学期の「哲学全般」の草案において、理念、自然そして精神の三幅対の生成を確認できると指摘しているが、^{註33}その第一の契機である理念の展開を担うのが、論理学と形而上学の一体化された思弁哲学、最終的には論理学ということになる。勿論両者の関係、内容更には全体系の内でのその役割の改変が、ヘーゲル自身においてスムーズに運んだとは到底思えない。多くの困難な問題点を含んでいたであろうことは容易に推察できよう。しかしたとえそうであったとしても、論理学がそのように内容的にも変化することにより、それまで論理学がもっていた入門・基礎としての役割を、ヘーゲルがもはや論理学に見出しえなくなったのは明らかである。一八〇五／六年冬学期に「哲学史」の講義が実施され、^{註34}次の学期には「思弁哲学」の講義予告がなされているが、これはそれを聴講した Gabler の報告では「精神現象学」と「論理学」であった。^{註35}これらのことを考慮するとき、それまでの論理学に課されていた役割を、今や精神現象学が担うものとして考えられている。論理学に先行せる意識の経験の学としての精神現象学こそは、意識をして形而上学的に構想された理念の学としての論理学へと導くものであり、それにより哲学そのものへの導入としての役割を担うことになる。

以上我々はイエーナ時代初期におけるヘーゲルの哲学を主として論

理学を中心に見てきた。イエーナ時代におけるヘーゲルの体系構想は、論理学、形而上学そして実在哲学から成立している。^{註36}そして論理学から形而上学への移行、理性的認識こそは、ヘーゲルが青年時代の宗教研究を通じて獲得した生・愛・生ける統一の、悟性の反省作用を媒介しての形而上学的認識である。その構成された体系にあって論理学は形而上学の前に置かれ、有限性の諸形式の産出でありながら、その有限性が同時に絶対者すなわち理性の側からみられることにより、その思弁的性格が強調された。それ故少なくともイエーナ時代初期に限るならば、論理学は我々をして絶対者へとなじませることにより、「無限の認識、絶対者の認識」への入門・基礎としての意義を担っている。

註1 現在出版されつつある『ヘーゲル全集』編集に関係した J. Ritter O. Pogeler, H. Kimmerle などの一連の研究成果を指す。

註2 主として Hegel-Studien Band 4 掲載の

H. Kimmerle: Dokument zu Hegels Jenaer Dozententätigkeit, Zur Chronologie von Hegels Jenaer Schriften 2 依拠。

講義予告中マル印のものは、イエーナ大学聴講生名簿などにより、一応実施されたと考えられるものである。ius naturae は計五回予告されている。諸般の事情を考慮するとき、いつかは明らかでないがその内の一回は実施されたと考えられるのが妥当であろう。

一八〇六年夏学期 Spekulative Philosophie oder Logik の予告がなされているが、それを聴講した Gabler の報告では

Phänomenologie und Logikが実施されている。尚ヘーゲルは一八〇八年十一月までイエーナ大学に勤務していたことになっているが、実際には一八〇七年三月頃よりバンベルグ新聞の編集にたずさわっており、一八〇六年九月十八日がイエーナ大学での最終講義であった。

註⁸ Hegel – Studien Band 4, H. Kimmert: Zur Chronologie von Hegels Jenaer Schriften S. 137 ff.

註⁴ Georg Wilhelm Friedrich Hegels Sämtliche Werke, Hrsg. v. G. Lasson Band XVIII: Jenerser Logik, Metaphysik und Naturphilosophie 序文 XIII

註¹⁰ Hegels theologische Jugendschriften, Hrsg. v. H. Nohl S. 146

註⁹ 中壘肇「イエーナ体系に関する形式論的考察」青吐社『現代思想』一九七八年十二月臨時増刊ヘーゲル S. 83

註⁷ 一八〇三年夏学期、一八〇五／六年冬学期の二回告示はなされていながら、しかし前者に関しては、同学期に「総合哲学概説」が告示され、その中には論理学と形而上学も含まれておるので、実質的には一回のみである。

註⁸ 最初の顕著な転機を一八〇三／四年頃に確認できる。この問題については本論四にて詳述した。

註⁹ Hegel Sämtliche Werke (J. A.) 6 Enzyklopädie S. 36

註¹⁰ Briefe von und an Hegel Hrsg. v. Hoffmeister S. 59

註¹¹ Hegels theologische Jugendschriften S. 295

註¹² ibid S. 302

註¹³ 『美作女子大学研究紀要』十一号（一九七八年）若きヘーゲルの研究——宗教から哲学へ——

註¹⁴ Hegel Gesammelte Werke Hrsg. v. H. Buchner u. O. Pöggeler Band 4 S. 12（以下 Differenz 参照）

註¹⁵ ibid S. 15 f.

註¹⁶ ibid S. 14

註¹⁷ 理性と反省の関係は次のようになろう。反省は理性の働きを対立へと固定することとしては悟性の働きである。しかし有限なものを止揚し、自らを理性へと高める限りにおいては理性的なものである。それ故理性は反省を通して悟性化されるが、悟性化され、対立したものが止揚され、理性化されるのは反省による。

註¹⁸ Differenz S. 74

註¹⁹ ibid S. 74

註²⁰ 註²で指摘したが、一八〇一／二年冬学期の「論理学および形而上学」の聴講者名簿が残っており、その中にはシェリングの弟もはいる。

註²¹ Rosenkranz: Hegels Leben S. 189 ff. 内容から判断すると、一八〇一～一八〇三年の間ぐらいのものと思われる。

註²² ibid S. 190 f.

註²³ Differenz S. 14

註²⁴ Rosenkranz: Hegels Leben S. 191

註²⁵ ibid S. 191

註²⁶ Differenz S. 17

註²⁷ Rosenkranz: Hegels Leben S. 191 f.

註28 勿論 *Jenenser Logik, Metaphysik und Naturphilosophie* に

はそれ以前のものと比較して、際立った点も見逃すことはできない。それは形而上学から自然哲学への展開に際し、形而上学の最後で論じられる絶対精神 (absoluter Geist) というヘーゲル哲学の中心概念の登場である。これにより体系の諸部門が絶対精神の自己展開として把握されることになる。この点からしても同論文はヘーゲル哲学における根本の言葉の獲得という点で画期的な意味をもつ論文である。

註29 Hegels theologische Jugendschriften, 1800-Systemfragment S. 348

註30 Rosenkranz: Hegels Leben S. 192

註31 Briefe von und an Hegel Hrsg. v. Hoffmeister I. S. 59

註32 しかし論理学と形而上学の関係はこれ以後も一定せず、何度か変化する。また形而上学が論理学に吸収されるといっても、前者が一方的に後者に吸収されるのではなく、論理学において形而上学の内容が含まれることにより、論理学そのものが重層的となり、さらに形而上学の内容の一部は精神哲学へと吸収される。

註33 Hegel - Studien S. 158

註34 *Geschichte der Philosophie* の講義も明らかに、哲学への入門のための新たな試みと考えることができる。

註35 註2の論文中に Gablerの手記が掲載されており、そこに確認できぬ。

註36 イエーナ時代におけるヘーゲルの体系構想は、絶えず変化し流動的であるだけに研究者の意見の分れるところである。